

評論文の学習を通して学習者が感じることは何か

安 木 裕 香 織

はじめに

教員二年目から、担任としてまた教科担当者としてともに過ごしてきた学習者達が、二〇一五年三月、六年間の中高での学びを終えて卒業する。学習者達はこの六年間にどのようなことを学び、身に付けてきたのだろうか。

それについて、現代文・評論文分野の学びという視点から私なりの考察を行い、今後の指導に生かしていきたいということが本論の試みである。その際、六年間の評論文の授業を終えたばかりの学習者の生の声に耳を傾け、指導者として接してきた自身の姿勢や授業のあり方について再考するために、以下のようにアンケート調査を実施した。本論ではこのアンケートの結果分析から見えてくる、学習者と指導者の評論文を扱った授業に対するそれぞれの意識および今後の課題について述べていく。

一. アンケート調査の詳細

実施日時…二〇一四年一二月

対象者…渋谷教育学園渋谷高等学校三年生(計一九一名)

実施項目…

1. 評論文(説明的文章)を現代文の授業で学習する目的は何だと思えますか。次のA～Hの中から、あなたの考えに特にあてはまるもの上位2つを選び、記号に○をつけてください。

- A 大学入試を突破するため。
- B 大学入学後、難解な論文を読むための基礎力を養うため。
- C 文章の内容を教養として身につけるため。

- D 他者の考えを正確に理解する力を養うため。
- E 他者の考えに対して自分の意見を持つため。
- F 論理的思考力を養うため。
- G 批判的思考力を養うため。
- H その他（記入欄あり）

2. 【1で選んだ項目について】

6年間の評論文（説明的文章）を扱った授業において、1で選んだ2つの項目は達成できましたか。以下の4つ（Iで達成できた II やや達成できた III やや達成できなかった IV 達成できなかった）のうちから、あてはまるものを1つ選び、記号に○をつけてください。なお、III、IVを選んだ人はそのように考える理由もあわせて記入してください。

- 1で選んだ項目の一つ目の記号について
 - I 達成できた
 - II やや達成できた
 - III やや達成できなかった
 - IV 達成できなかった
- 1で選んだ項目の二つ目の記号について
 - I 達成できた
 - II やや達成できた
 - III やや達成できなかった
 - IV 達成できなかった

3. 【1で選んだ項目について】

1で選んだ項目を達成するために、効果的であったと考えられる授業の形態はどのようなものですか。次のA～Iの中から、あなたの考えに特にあてはまるもの上位2つを選び、記号に○をつけてください。

- A 問題のついていない文章を個人単位で読解する。
 - B 問題のついていない文章をグループ単位で読解する。
 - C 問題のついていない文章をクラス単位で読解する。
 - D 問題のついていない文章を個人で読んで問題を解いた後、教師による解説を聞く。
 - E 問題のついていない文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出す。
 - F 問題のついていない文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出し、クラスで共有する。
 - G 筆者の論の要約を個人単位で行う。
 - H 筆者の論に対して自分の意見を書く。
 - I その他（記入欄あり）
4. 6年間の現代文の授業で扱ってきた評論文（説明的文章）の中で、印象に残っているものがあれば教えてください。作者や作品名が分からない場合、「○○」のような内容の作品」等の書き方でもかまいません。

5. 評論文(説明的文章)を扱った授業について、感想や意見があれば記入してください。

二. 結果から見えてくるもの

二-1 学習者が評論文を授業で学習する目的とは

―設問1の調査結果より―

1の設問においては、中高六年間、評論文に関する現代文の授業を受けてきたことを踏まえ、今高校三年生が「評論文を授業で学習する目的をどのようにとらえているのか」について調査した。

結果としては、D「他者の考えを正確に理解する力を養うため」(二十六%)、F「論理的思考力を養うため」(二十五%)、A「大学入試を突破するため」(二十一%)の三つの項目が全体の七割以上を占めた。A「大学入試を突破するため」の選択者が多いのは、大学受験を間近に控える層を対象としたアンケートであるということからも想定内の結果である。また、D「他者の考えを正確に理解する力を養うため」、F「論理的思考力を養うため」が全体の約半数を占めていることも、受験生が大学入試問題を解くにあたり特に必要な力であるということを、学習者が日常の学習において実感していることによると考えられる。

次に数値が高かったのはC「文章の内容を教養として身につけるため」(十二%)であり、これは想定よりも高い数値となった。このことが意味しているのは、学習者にとって読み応えのある示唆に富んだ内容の評論文を授業に取り入れることが求められているということである。また、六年間の評論文の学習を経た上で、

この項目に評論文を学習する目的を感じた学習者が相当数いることから、概ね学習者の満足できる素材を用いて授業を行うことができたとも言えるだろう。

B「大学入学後、難解な論文を読むための基礎力を養うため」(七%)については、おそらくまた大学入学後に読むであろう論文のイメージが十分には湧いていないことが窺える。また、評論文を学習する目的上位二つを選ぶという設問の条件からも、他の選択肢に票が集まったものと考えられる。しかしながら、学習者の授業での積極性や目の前の文章に対して深く追究しようとする姿勢を鑑み、今後は大学入学後の研究に対する興味関心も高められるような授業をより一層試みる必要があると感じる。

さらに、E「他者の考えに対して自分の意見を持つため」(四%)、G「批判的思考力を養うため」(三%)が続く。これらの項目が低い数値を記録したことの要因の一つとしては、本校国語科において、「読む」力を主に養う「現代文」の授業と「書く」「話す」「聞く」力を主に養う「表現」(中学一年から中学三年まで)「文章表現」(高校一年のみ)の授業とを概ね分けて展開していることが考えられる。また高校一年からの三年間において、現代文の授業で扱う評論文はほぼ大学入試問題であり、授業はその問題演習という形で行っていることから、それぞれの評論文について個々の意見を問う機会が少なかったことも関係していると思われる。

指導者側としては、高校生段階においてはより多くの評論文に当たることと学習者の思考力を養う素材を多く提供したいという思いや、時間制限のある授業という枠組みの中で他の教材との兼

ね合いを考えながら授業展開をしなければならないという制約を抱えながら、その中で最善の方法で授業を行ってきたつもりではある。しかし、学習者が出会った文章について感じたこと、考えたことを表現する機会は、学習者の好奇心や思考力を高めるためにも有効であるので、「現代文」の授業においても何らかの形でこれまで以上に行うことが望ましい。

H「その他」としては「趣味」「論理的思考力、漢字力、他者の考えを理解する力を統合した日本語力を養う」などが挙げられ、評論文を扱う目的について独自の視点で思考を巡らせている学習者もいた。

二・ii 評論文を学習する目的は達成されたか

―設問2の調査結果より

2の設問においては「1で選んだ評論文を学習する目的に対する達成感」について調査した。結果として、どの項目についても概ね「1達成できた」「2やや達成できた」が選択されており、学習者は評論文を学習する目的についてほぼ達成できたと感じていることが分かった。

Ⅲ「やや達成できなかった」、Ⅳ「達成できなかった」を選択した学習者は少数にとどまったものの、1A「大学入試を突破するため」、1F「論理的思考力を養うため」、1D「他者の考えを正確に理解する力を養うため」については十人前後の学習者がⅢ「やや達成できなかった」を選択している。1Aについては「まだ大学入試を終えていないからなんとも言えない」ということから選

択する学習者が多く、1F、1Dについても目の前の大学入試問題において、まだ満足できるほどには点数に結びつけきれないと感じる場合に選択する割合が高かったことが考えられ、1Aにもなった数値であることが窺える。いずれにしても、大学入試は学習者にとって切実な問題であり、評論文を扱う授業が大学入試問題に解答していくための力をも培うものであるべきことは明らかである。指導者はこのことを今一度意識した上で授業を行っていく必要がある。

二・iii 評論文を学習する目的を達成するために効果的な

授業の形態とは―設問3の調査結果より

3の設問においては「1で選んだ評論文を学習する目的を達成するために効果的であったと考えられる授業の形態」について調査した。1で数値の高かった1D「他者の考えを正確に理解する力を養うため」、1F「論理的思考力を養うため」、1A「大学入試を突破するため」について票が集まったのは、3F「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出し、クラスで共有する」である。この授業の形態は、高校一年から評論文を扱う授業がほぼ大学入試問題演習になった時から多く取り入れてきた形態であり、学習者としても効果を感じられていたことが窺える結果となった。

また、1D、1F、1Aそれぞれについて、学習者が次いで効果的だと考えた授業の形態は、3E「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出す」、3D

「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、教師による解説を聞く」である。この二つの授業の形態も、高校三年間で多く取り入れてきたものであることから、概ね現状の評論文の授業形態に満足している学習者の姿を確認できる。特に3Dのような授業の形態は、大学受験生という学習者への対応として高校三年生の授業で多く用いてきた。また多くの予備校でも同じ授業の形態を用いていることから、1A「大学入試を突破するため」を選んだ学習者が、他の項目を選んだ学習者を凌いで3D選択者一位という結果となったことに納得できる。

3の設問で結果として見えてきたことはそれだけではない。学習者が選んだ3F、3E、3Dに次いだのが、3B「問題のついている文章をグループ単位で読解する」であり、このことから、多くの票を集めた上位四項目のうち、三項目が「グループ学習」に関する項目であることが分かった。この学年において、グループ学習は中学一年生の最初の授業から用いてきた授業形態であり、評論文、小説を問わず、中高六年間の現代文の授業において最も多く用いてきた形態である。5の設問（評論文を扱った授業に対する感想や意見）を求めた設問）に対する結果は後に詳しく述べるが、その設問においてもグループ学習について多くのコメントが寄せられるなど、グループ学習は学習者にとって六年間の現代文の授業を特徴づける形態であり、大きな効果を感じられるものであったことが窺える。

さらに、1B「大学入学後、難解な論文を読むための基礎力を養うため」についてもこれまでの分析とほぼ同様の結果が得られ

たことを明記しておきたい。1Bにおいては、3E「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出す」が最も多く、次いで3F「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出し、クラスで共有する」、3D「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、教師による解説を聞く」、3B「問題のついている文章をグループ単位で読解する」と続くことから、このような授業の形態が大学入学後にも必要となる力の育成に効果を与えている可能性も窺えた。

二 iv 学習者が選ぶ印象に残った評論文とは

―設問4の調査結果より

4の設問においては「中高六年間の間に授業で扱ってきた評論文の中で印象に残っている作品」を調査した。自由記述である。全回答数七十二、作品数十九、その他に個別の作品名ではなく、「〇〇論」などの学問の分野で述べたものの、授業で扱ってきた作品に対する全体的な感想などが見られた。

学習者の印象に残った作品第一位は高校二年時に扱った『ラムネ氏のこと』（坂口安吾・一九四二）で十一票であった。この作品は坂口安吾の経歴談をもとに、「絢爛にして強壯な思索の持主」とはどのような人なのかについて述べたものであり、評論文というよりは随筆に近い作品ではあるが、生き方について論じた文章と言えるので、ここでは評論文として扱いたい。どのような時代においても、社会の物のあり方を変えてきたのは、勇気を持って未

知の世界に足を踏み入れることのできる「絢爛にして強壯な思索の持主」であるという本文の主張は、生涯にわたる自分の生き方を考える段階にいる思春期の青年にとっては、大いに刺激を受ける作品であったようだ。

第二位は中学二年時に扱った『砂糖の世界史』（川北稔・一九九六）で九票を集めた。この作品は学習者が四年前に触れた作品であり、その後も数多くの作品を扱ってきたことを考えると、ここまでの票数を集めるのは指導者側として意外ではあった。しかし、年数を経ても学習者の心に残り続けているからこそ、その内容や授業のあり方には大いに検証する意味があると考えられる。

学習者の興味を惹きつけた要因としては、まず作品の内容が学習者にとって身近な文化についてのものでありながら、その文化が決して幸福な歴史から生まれたものではないという衝撃を与えているものであったことが挙げられる。具体的な内容としては、三角貿易というシステムの頂点に立ったイギリス人が、黒人奴隷を使つたからこそ紅茶に砂糖を入れるという文化を築くことができたというものであり、学習者はこの作品を扱ったのと同じ時期に社会科においても三角貿易について詳しく学習するなど、教科の枠を超えた学習が実現できたことも、学習者に印象を残した大きな要因と言えるだろう。

また、高校二年時に小説『こころ』（夏目漱石・一九一四）を授業で学習する前に、近代という時代性を文章から学習するという目的のもと、講演記録である『現代日本の開化』（夏目漱石・一九一一）を扱ったが、作品同士の関連性の深さからこれらの作

品が印象に残ったとする学習者も数名おり、扱う作品同士の関連性も学習者にとって影響が大きいことが窺えた。

第三位は高校三年二学期末に扱った『疾走する精神——今、ここから始まる思想』（茂木健一郎・二〇〇三）で八票を集めた。この作品は二〇〇九年度の高知大学の入試問題演習という形で用い、六年間の現代文の学習の総まとめとして扱ったものであり、学習者にとってはアンケート調査実施時に最も近い時期に授業で学習した作品である。

本文において筆者は「これからの人類の知的探究の方向性を特徴づける重要な概念として『多様性』があることは疑いない」とし、人間は自然から自らを切り離すだけの知性を持った以上、その知性を「『持続可能』な粘り強い知性」として磨き上げ、「多様性」と向き合っていく必要があるという。そしてそのためには、「多様性の恵みが普遍的原理によってもたらされることを精査」していくべきであると締めくくる。難解な内容の作品であるが、だからこそ、授業では3F「問題のついている文章を個人で読んで問題を解いた後、グループで問題の解答を出し、クラスで共有する」という形態を用いた。様々な方法で文章にアプローチさせることで、学習者の理解を深めようと考えたのである。これまでの授業においても、グループ学習、その結果をクラスで共有する時間は白熱する傾向にあったが、この作品はこれまでに扱ったものの中でも特に熱い議論が重ねられたことが記憶に新しい。

この作品は、私たち人間が「普遍的な動的プロセス」をたどりながら多様化していくことも示しているが、学習者にはこの本文

のメッセージを自身に対するものと受け止めてほしいと私は考える。学習者には今後社会で活躍していく中で、唯一の正しい答えを創りだすのではなく、このような自然や人間のあり方を知った上で多様な答えを導きだし、常にその是非を問い続ける知性を持つてほしいからだ。このような指導者からのメッセージも学習者が受け止めてくれたのだとすると、教師冥利に尽きる。

その他に学習者が挙げた作品は主に高校で扱った作品であり、種類は哲学的なものから時代背景を論じたものなど多岐にわたる。いずれにしても、通念に疑問を投げかけたり、新しい課題を提示したりする評論文を読んで考えることに対し、学習者は概ね好意的である。1の設問においてC「文章の内容を教養として身につけるため」に評論文を授業で学習するとした学習者が想定よりも多かったこと、また5の設問において学習者から「あまりなじみのない考え方に関する文章はおもしろかった」、「基本的にどの文章も新しい学びがあつて楽しいです」という感想が挙げられたことから、評論文を読むという学習が総じて学習者に満足感を与えていることが分かった。

二・V 評論文を扱った授業は学習者にどのように受け止められているか ― 設問5の調査結果より

5の設問においては「評論文を扱った授業についての感想・意見」を問い、これまでの授業に対する学習者の受け止め方を知ること、で今後の授業のあり方を模索することを目的とした。自由記述である。全回答数六十。ここでは、重複する回答および今後の授業

を考えるとという点で特に参考となると思われる回答を取り上げることとする。

感想・意見が最も多かったのは、「グループ学習」に関するものであり、二十二名がそれについて回答した。概ね肯定的な感想を述べるものであったが、中にはグループ学習の持つ課題について意見を述べるものもあった。肯定的な感想としては、まず「やっぱりグループの授業が一番レベルが高かったし、やりがいがあった。」など、毎度の白熱する話し合いを楽しんだ様子が窺えるものが挙げられる。また、「グループワークは友達に自分の意見を説明しなきゃいけないので、その時自分の考えが整理されたり何がかつていないのがわかったり、友達を考え方が参考になつて良かったです。」という感想からは、具体的にどのような点にやりがいを感じていたのかが窺えた。

一方、グループ学習を通して感じた課題としては、この授業形態にうまく馴染むことのできない学習者もいるということである。「グループワークは、自分の意見を言つたときうまく説明できないし、間違つてるといふやだったので辛かった。」「グループ学習でかなりよく理解できるようになりましたが、意見を言えない人もいました。」という感想に代表される学習者に対し、指導者がどのようなアプローチをしていくべきなのか、今後さらに考え続けていくことが求められる。

また「分からない所は分からないので各グループごとの意見を共有する時間よりも、先生の解説の時間を長くしてほしいかったです。」という意見もあり、時間制限のある授業の中で、グループ学

習と指導者による総括の時間のバランスについてもさらに考慮する必要性が窺えた。さらに「グループで文に対する意見を話す方がより良いと思う」、「また入試問題をそんなに意識しなくてよい中学の間はもっと意見を書かせてもよいと思います。」など、本文に書かれている内容についての意見を述べる授業に魅力を感じる学習者の姿もある。――iにおいて、評論文を学習する目的を、1E「他者の考えに対して自分の意見を持つため」(四%)、1G「批判的思考力を養うため」(三%)ととらえる学習者が低い数値に留まったことから、評論文の授業において学習者が自由に意見を述べる機会はやはり求められていると言わなければならぬ。このように、この設問においては、今後のグループ学習のあり方を考えるにあたって有効な感想や意見が多く述べられた。

さらに、この設問では学習者が授業において出会う評論文そのものの持つ性質が重要であることも明らかとなった。「読み手の意識を変えるような啓蒙的な文章を読むと楽しかった」、「現代文の授業を通して、自分ではなかなか読まないような文と触れ合えた。」など、評論文を通して知的な刺激を受けた学習者からの感想も多く、素材選びから授業がスタートしているのだということを変更して実感する結果となった。中には「西洋中心主義・明治維新における日本人の葛藤・近代科学批判は教養として必須だと思う。」という意見もあり、これらについては全て授業において学習した評論文の内容であるが、学習を終えて、改めて評論文は教養を身に付けるための作品であると受け止めている学習者の姿も見受けられた。1の設問において、C「文章の内容を教養として身

につけるため」を選択した学習者が比較的多かったことを裏付ける結果がこの設問において得られたということだろう。

総括

中高六年間を通して、学習者が授業で評論文に触れることで得られるものは何なのか。指導者の立場としては様々な思いを込めて授業を展開してきたが、それを受け止める学習者はどのように感じてきたのか。これらの問いをなくしては、評論文の学習は地に足のつかないものになってしまう。本論文では学習者の声を分析する中で、自身の評論文指導の現状および今後の課題を明らかにすることを目的としてきた。

様々な発見があった中でも、特に大きく浮かび上がってきたのはグループ学習の効果である。各設問に対する分析結果の項目で既に述べた通り、学習者が評論文を授業で学習する目的を達成するために、効果的であったと考える授業の形態の上位四項目のうち、グループ学習に関する全ての項目が入ったことはやはり特筆すべきである。また、5の設問においてグループ学習に関する感想・意見は最も多く見受けられた。

ではなぜこのような結果が得られたのか。私は、中学一年からの地道なグループ学習の積み重ねにその理由があると考え、高校三年生で大学受験を目前に迎えると、「結局一人で解くのだから、グループで他の人と一緒に問題を解くのは時間の無駄である」というようなことを考える学習者がいてもおかしくないと推察していたが、そのような意見は見られなかっただけでなく、評論文

を学習する目的を1A「大学入試を突破するため」とした学習者の多くがグループ学習を効果的にとらえている。これは、大学受験生となる前までにグループ学習の効果を感じているかどうか、そのままこの学習で得られる効果にも影響しているということでもあると考えられる。

また、他者の考えの理解や論理的思考力の育成、大学入学後に論文を読む力の育成にも効果を感じている学習者が多いことから、グループ学習は大学受験に留まらず、その先にも必要な能力を高める効果もあると言えるのではない。

もちろん、大学入試を突破して希望の進路につくということは学習者にとって切実な願いであり、評論文を扱う授業もそのような学習者のニーズに応えるものであるべきことを忘れてはならない。今回の調査では、学習者は想定以上に大学入試を意識して授業を評価していることも明らかとなった。評論文を学習する目的の上位三項目は大学入試にも直結するものと言え、思うように点数が伸びないとそれに対する達成感もなかなか得られないということが現状である。また、問題を解くテクニクの教授をさらに求める学習者も少数ながら見受けられる。学習者が日々授業を受けながら知的な充実感を得るとともに、大学入試という場においても力を発揮できるという自信をつけられるような授業展開を、指導者は今後さらに追究していく必要がある。

さらに本論文において発見した重要なことは、やはり評論文そのものの素材選びがいかに重要であるかということである。評論文を学ぶ目的として1C「文章の内容を教養として身につけるた

め」を選択した学習者の数、これまでに読んできた評論文の中で印象に残った作品の特徴、授業に対する全体的な感想・意見から、新しい学びを提供するような示唆に富む文章との出会いを学習者が心から楽しんでいることが窺えた。素材が興味深いものであれば、当然学習者はそこから主体的に学ぼうとするだろう。そしてそのような主体的な行為が大きな効果を生むことは明らかである。指導者は、学習者が自ら学びたいと思えるような素材を精査する作業を怠ってはならない。そして、そのように魅力的な評論文を提供できれば、学習者の望む「評論文に対して自分の意見を述べる機会」も豊かなものとなるはずだ。グループ学習の効果もさらに増すところだろう。

学習者の日々の学習はそのまま未来の学びへとつながっている。指導者は学習者自身の学びを充実したものとするための陰の立役者である。ならば、その役割を果たせるように、指導者自身も日々の自身の活動を振り返り、成長していく必要があるだろう。今回のアンケート調査では、以上のようにこれまでの授業の成果も今後の課題も明らかとすることができ、自分自身にとって大きな学びの機会となった。

私は、大学院在学中から今まで「生涯学習のための国語教育」について常々考えてきた。学習者が国語科の学習を通して学ぶことが一過性のものであつてはならず、生涯にわたって自分で自分を高めていくための学習力を育みたいと考えているのだ。そして、そのような力を育むために、あるテーマに対してある一人が自身の考えを論じている評論文が貢献できる可能性は大きいはずだ。

学習者には、多様な考えを認め、柔軟に自己の考えを構築し続ける力を身につけてほしい。今後もこのような意識を持つて日々学習者と対峙していこうと思う。

（渋谷教育学園渋谷高等学校）